
G20

野球人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G20

【Nコード】

N5465Z

【作者名】

野球人

【あらすじ】

ごく普通の高校生活を送っていたはずの俺、中野修司なかのしゅうじはある事件をきっかけにどこか分からない異世界に送り込まれた。

元の世界にもどり、あの事件の真相を探るべく冒険を始める。

登場人物紹介（前半）

中野修司・・・本作の主人公。ある事件をきっかけに異世界、『ロカード』に飛ばされてしまう。男

エルニ・レイナ・・・G10に所属。陛下とは・・・？女

ナルノ・シュターゼン（陛下）・・・『ロカード』の首都『カドイフ』を治める王族。年齢13。女

カンデ・ローナ・・・G2に所属。G2でも最下位の实力。女

レット・セイカ・・・G20に所属。G20で第2位。女

インダ・ドル・・・G14に所属。女性に対してキザである。男

まだまだ出ると思いますが、メインは大体こんなかんじです。

・・・もう朝・・・か？

「ん〜・・・」

頭がまだボーとしている。寝起き特有の何も頭がない状態が続く・

「つてあれ？」

こ、ここは？俺はなぜこんなことに？

「え？え・・・？」

あたりを見回してみると、とても豪華な部屋にいたことがわかった。

「あれ？確か俺は・・・」

今、俺は危機的状況に陥っている・・・とでも言うのだろうか。

「ちよつ！待てつて！」

目の前にはナイフを手に持ち今にも刺してきそうな覆面男がいる。

「か、返せ！」

覆面男はさつきからこればかりだ。なんだ返せつて・・・

「だ、だからなにをだ！とりあえず落ち着け！」

「お前のせいで俺の息子は死んだんだ！」

はい！？全く意味がわからない！と、とりあえず現状を確認だ！

・学校から帰ってきたらなぜか家に覆面男がいた。

・俺を見るなりこうなった。

全然わからない！もちろん俺は覆面男の息子なんて知らないし、身
近にいた人が死んだなんて聞いてない。

「う、うわっ！」

ズキッとわき腹に痛みが走る。さ、刺された・・・のか？意識が・

。

つてはずだった。なぜこんなところにいるんだ？

「起きましたか？」

「う、うわ！」

だ、だれ！？

「あ……。すみません……。」

いきなり声をかけられたと思ったなら今度は謝られたぞ？なんだ？

「私の名前はエルニ・レイナ。エルナとお呼びください。」

「あ……。エルナさん？ってどこの人？」

「どこって……。？この国ですが？」

「ここってどこだよと言おうとしたら……」

「あなたのお名前は？」

あ、ああそついやまだだったな。

「俺の名前は中野修司なかのしゅうじ。ってかここはどこ？」

「ここは王族付属の寮G1です」

「……。G1？」

聞き慣れない言葉に聞き返す。

「はい。詳しい話は王宮に行ってからあると思うので……」

なるほど。王宮とやらに行ったら事情がわかるのか。

「わかった。じゃあさっそく行くよ」

「はい。では一緒に私が同行させていただきます。」

王宮への行き道。

「ところで俺はなんでこんなところに居るんだ？」

ほとんど記憶が無いので半ば独り言のように言つと……

「さあ……。？ここから東のほうにある森の奥で倒れておりました

よ」

なんでそんなところに……。とか考えている内に王宮っていうところに着いた。

「う、うわ……。」「

中はとんでもなく豪華だった。俺が寝ていた部屋。確か……。G1だっけ？もけっこう豪華だったけれどあれとは比べ物にならない。

「こちらですよ」

「お、おう」

そして一際大きく、キレイな扉の前に来た。

「さあ、これから陛下にお会いしますよ」

G 1 (後書き)

新しい小説を投稿させていただきました。

今回は戦闘物を書くことと思いいこのG20を書きました。少しでも興味を持っていただいた方、展開のペースは遅いと思いますが学生なのでそこは見逃してください。

下手だと思いますがご指摘、感想をよろしく願います。

入寮

ガチャリ・・・と思い扉が開いた。開けたのではなく開いたのだ。
「・・・」

少し戸惑いつつも奥に進む。まあ隣にはエルナさんも居る事だし。
「よくきたな」

少し幼さを残し、それでいて凜とした声が聞こえてきた。あれが陛下・・・？ってどう見ても12、3歳の少女なんだが

「陛下。この方が例の・・・」
「うむ」

例のって・・・あ、俺のことか。

「名前は・・・？」

「あ、えつと・・・中野修司です・・・」

「ナカノ？聞かない名前だな？」

まあ日本名ですからね。

「じゃあ、さっそくだがエルナ」

「は、はい」

「彼をG20に入寮させてくれ」

何？G20って？さっきのはG1だったよな・・・？

「えっ！？い、いきなりですか！？」

エルナは驚いているがこっちはさっぱりだ。

「わかったか・・・？」

「はい・・・」

〈帰り道〉

「はぁ・・・」

エルナさんは帰り道ずっとため息ばかりついている。

「ど、どうした・・・?」

さすがに心配になったので聞いてみた。

「だってあなた!G20ですよ!？」

「え・・・だからG20って何？」

「ほ、本気で言ってるんですか!？」

本気だよ。俺はいつでも本気だよ。

「うん。一応・・・」

「あなた、どこ出身なんです？」

「日本だよ。三重県出身」

「ニホン?ミエ?聞いたことありませんね・・・」

えく・・・。マジかこの人。っていうかさ・・・

「あの、ここはどこなの?陛下さんは何にも教えてくれなかったけど」

「あ、えつとここは『ロカード』、その中の首都『カドイフ』です。」

「それこそ聞いたことないぞ・・・?ってことはここは・・・い、異世界ってこと?」

「え・・・。それって」

異世界ってこと?と言いかけたとき

「あっ!あそこに見えるのがG20ですよ」

で、でかい・・・。声が出ないほどの衝撃だった。

入寮（後書き）

さつそく2話目を投稿させていただきました。
できるときに投稿していくのでそのところはよろしく願います。

では、ご指摘、ご感想お待ちしております。

レット・セイカ

目の当たりにした『G20』。さっき行った王宮ほどの大きさがあ
る。

「さあ、入りましょうか」

エルナの声には少しばかり緊張が混じっていた。

本日2回目の重いドアを開ける。(てか、勝手に開いた。)

「なあ、なんでこのドアって勝手に開くんだ？」

ずっと思っていたことを聞いてみた。ちなみに帰り道、エルナに敬
語で無くても良い。と言われたので、それからはタメ口だ。

「なんでって……。それは、『ワンス』ですよ……？」

「わ、ワンス？」

聞き慣れないその単語を言い返す。

「はい。手を使わずにドアを開けたり、物を動かしたりすること
ですよ？」

うん？ようするに魔法……。？いやいや、魔法なんてこの世にある
わけ……。でもここは異世界らしいし……。なら有りなのか？
いやしかし……。

「あつ！セイカさん……」

イロイロ考えていると目の前に一人の少女がいた。碧眼で金髪だ。
みるからに日本人ではない。

「あら。エルナさん。そちらの方は？」

セイカと呼ばれた少女は俺の方を見て言う。

「あ、こちらはナカノ、シュウジさん。」

「ああ、例の……」

なんだよ例のって。

「シュウジさん。こちらはレット・セイカさん。」

レット・セイカ（後書き）

今回は微妙なところで終わってしまい申し訳ありません。

新キャラの説明もできなく自己都合により今話は終わってしまいました。
した。

次の話できちんと説明して行くのでよろしくお願いします。

G 2 0 (説明)

「はじめまして」

軽くあいさつを交わす。すると

「ではさつそくこのG 2 0を説明しますわ」

会ったばかりだというのにセイカはこのわけのわからなく、どでかい建物について教えてくれるそうだ。

「では、まずここではG 2 からG 2 0までの格付けがされています。

」

お、さつそくの説明だ。よく聞いておこう。

「一番下がG 2、上がG 2 0となります。」

「へへ、あれ？でもなんでG 1が無いんだ？」

気になったので聞いてみると

「G 1はこの学校の教師なんです」

「えっ？ここ学校なの？」

初めて知ったぞ？そんなこと。

「それはですね・・・」

～説明中～

とりあえずこういうことらしい。

ここはカドイフにある学校で『セント高校』。実際は違うのだが俺が勝手に、日本名をつけた。そしてG 2 0はその学校でもトップクラスのやつらがいる。トップクラスというのは勉強でも、スポーツでもなくさつき教えてもらった『ワンス』が強力な人。つまりあの魔法が強いほど学校でも優等生ということらしい。

で、この俺こと中野修司は陛下のご命令でこのG 2 0に編入されたってことらしい。

学校自体はこの寮から約100Mほどの距離でとても近い。しかしこのG20を見て、でかいと思ったがこれはG20だけではなくG2からの全員が入っている。つまりG2からG20までのおよそ300人ほどがこの寮にいるらしい。

(でも部屋割りはちゃんとクラスごとに分かれてるんだからややこしい・・・)

G2などは、たんなる格付けなのでG2からG20までいるんだとか。

「まあ、G20とかはたんなる成績だと思っていてください」

「はあ・・・」

うん・・・。ざつと説明してもらったけどわかりにくいな・・・。まあその内慣れるだろ。

「そして私はG20の中でも第2位の实力ですわ!」

「へ、へえ、すごいな」

やや声を大きくしてしゃべるセイカに少し驚く。

「で、では修司さん。部屋にご案内します」

「お、おう」

エルナも少しびっくりしていたようだ。

「じゃあ、いろいろ教えてくれてありがとうな」

「お安い御用ですわ」

セイカに例を言って自室へと案内してもらつ。

G20（説明）（後書き）

今回は説明が多くてすみません。でもやっぱり説明していかないとわからなくなるだろうし。自分も（当たり前ですが・・・）
少しづつ、ゆっくりだと思いますが進めていくのでよろしくお願
いします。

自室にて

「ここが修司さんのお部屋になります」

「ほお・・・」

思わずこんな声が出てしまう。俺はなぜだか知らんけどG20に格付けされたから部屋も豪華なんだろうか？

「と、言ってもベットとかしか無いんだな」

「と、言いますと？」

「ああ、別に不満では無いんだが、テレビとかパソコンとかは無いのかなって・・・」

こんな異世界に来てまでもそんな心配しかできない俺は自分自身に少々あきれるが・・・

「てれび？ぱそこん？ああ、東洋の物ですか？」

「まあ、そうらしいな・・・」

自室にくる途中、エルナに日本の話をしたんだが、うまく伝わらなくけつきよくこんなかんじになった。

「あの、また明日、王宮に行かなければならないので今日はゆっくりしていて下さい」

「へ？また行くのか？」

正直ああいうところ、苦手なんだよなあ・・・

「ええ。まあ、状況があれですし・・・」

「状況？」

「い、いや。こちらの話です。では夕食の時間にはまた呼びに来ますね」

と言ってエルナは出て行った。まあ夕食までのんびりしてるか。

「……さん。修司さん！」

「ん……？」

「起きてください！夕食ですよ？」

ああ、寝てしまったらしい。でもどこな知らないところでも寝れる俺って、適応力すごいね。

「食堂に案内しますので」

「わかった。行くか」

これまた食堂は広いのなんの。って300人程にいるって行つてたからあたりまえか。

「では、修司さんは裏方へ回ってG1の人たちへ挨拶に行つてください」

「え！確かG1って先生がいるところだよな……？」

「はい、そうですね……？」

ん？このエルナの疑問顔。どっかで見たことあるような……？あれが既視感つてやつか。

「こつちの職員室みたいなもんだよな……。なんとなくイヤだな日本にいた時のことを思い出し、しぶい顔になる。」

「そんなこと言わずに！別に悪いことして行く訳ではないですしそりゃそうだ。ここにきてまだ半日はかりしか経ってないのに、呼び出しなんてどんだけ大物なんだよ。」

「ここからG1までは一本道なのでその第一ゲートから行けば着きますよ」

「わかった。ありがとな」

エルナに礼を言つてG1へと向かう。ちなみに俺が最初寝てたところは、G1でも保健室みたいところらしい。

「っていうか……。やつぱり行くのイヤだよな。職員室……」

日本での行いが頭を過ぎる。世話になつたよな。よく……。

自室にて（後書き）

更新が不定期ですいません。少しずつG20の世界がわかって来た
でしょうか？

バトルシーンは都合によりまだ出せずにすいません・・・
あ、頭の中ではちゃんとできているんですよ！？ww

たぶん説明がわかりにくいと思いますので
わからないところは感想に書いていただくか
メッセージを送ってもらったら説明をしますので。
これからもよろしく願います！

クラスメイトは!?

再びG1へと来た。とりあえずノックを試してみる。すると
「名は?」

これだけの声が返ってきた。

「あ、中野修司です」

「ナカノ? ああ、入れ」

こちらは手動で開く。

「君が例の子か」

「はあ、たぶん・・・」

話しかけられたその女の人は黒いスーツをビシッと着ていた。

「私はメイサ・リントイド。君の担任だ」

担任の先生か。悪い印象を持たれないように・・・

「ちなみに私は見た目では無く、実績で判断するぞ?」

な! 読まれた!?

「ふつ、このくらいは常識だ」

うーん。人の心を読むが常識とは、常識はずれだな。

「わけのわからないことを考えるな。とりあえず食堂へ一緒にこい」

ええ! また行くのか! まあ深く考えないでおこう。また読まれるし。

「えー。今年から担任になるメイサ・リントイドだ」

今は何か学年が変わった時期らしく一組(俺はこの一組らしい)全員がメイサ先生を見ている。そして・・・

「すでに話題となっているが転校生を紹介する」

ハイ。俺の出番。

「えっと。中野修司です。よろしくお願いします・・・。」

少々戸惑いながら言う。だってさ・・・。

(女子率、高くないか!?)

ほとんどどってか一組全員女子!?

クラスメイトは！？（後書き）

今だに物語の中で一日が経っていないことに気づきました……。急遽、先生を出すことになったので。

一組は大変なことになりました。

もうすぐようやく説明が終わりそうですw

ではご指摘、ご感想お願いします！

(な、なんてことだ・・・。)

俺はついつい心の中でつぶやいてしまう。普通の男子高校生なら喜ぶべきなのかもしれないが、何しろ魔法が日常的に使われている世界に来て、そのうえ男子1人。これは思っていたより精神的に苦痛だ。

「おい。あいさつをせんか」

「あ、はい！」

メイサ先生に怒られたので一応自己紹介にうつろう。

「え、中野修司です。よろしく願います。」

一組全員(約30人ぐらい?)があたりまえだがこちらを見ているから少々緊張をしてしまう。

「よし。中野は理由があり、この世界のことを全く知らん。明日は学校の説明から入る。クラスごとにある始業式は明後日に持ち越す。解散！」

え？終わり？ご飯は？

「中野。お前の部屋は400号室だ」

ポイントと鍵を投げられる。それをキャッチし、ここに居ても何にもならないので言われた400号室に移動する。

（自室）

（つてここ、エルナに教えてもらった部屋だな……。）
ベットに寝転びながら今日起こったことをおさらいしてみる。

まず俺は日本からここ、ロカードへと飛ばされてしまった。そこで
エルナ・陛下・セイカ・メイサ先生に出会った。

いつかは帰ろうと思っっているが今は全くわからないのでここに居よ
うとは思っ。

さらにこの学校ではG2からG20までの格付けがされており、俺
はなぜか1番上のG20に格付けされた。

（はぁ……。明日起きたら夢でしたってオチを期待しよう……。）

（翌朝）

期待はむなしくやはり部屋は400号室、ドアにはG20と書かれ
た札、その横にナカノ・シュウジと書かれていた。

「おはようございます。こんなところでどうしたんですの？」

珍しい人に声をかけられた。確か……

「セイカ……？」

「はい？」

「いや……。特になんでも無いけどさ……」

そこには昨日会ったG20、レット・セイカが居た。

「そんなことより早くしませんと朝のHR本ルームに間に合いませんよ？」

「え！マジか！？」

俺はこの世界にもHRとかあるんだなあと思いつながらセイカについ
ていく。

400号室(後書き)

ようやく1日経ちましたねw

途中でまとめながらじゃないと作者もわからなくなって来てしまうので・・・

まだ予告している戦闘はありませんが次回かその次ぐらいに出しますので。

すいません・・・

ではご指摘、ご感想お願いします。

カンデ・ローナ

「さて！ここが我が1年1組ですわ！」

いや……。そこまで説明されなくても書いてあるし。ちなみになぜかこの世界の言葉、文字は理解できる。その1組に入ると……
「おい、中野。早く席に着け。あとレットもG20だからと言って遅刻は許さんぞ」

「わ、わかつていますわ！」

む？あのセイカが押されている？まあG1……。もとい教師にはやはり太刀打ちできないのだろう。と思いつつ席に着く。

「昨夜のクラス集会でも言ったが私がこれから君たちの担任のメイサ・リントイドだ。さらに転校生は……。もういいか」

うん。スルーだ。まっいいか昨日やったし。しっかし女子だけだなあ……。とキョロキョロしていると

(……。ん？)

ジッとこちらを見ている人が居る。確かどこかで見た……。いやあるわけないか。相手もこちらの視線に気付いたのか目を反らしている。

「では今日からさっそく授業だ。全員外へ」

え？HR終わったの？外で授業ってことは体育か？体育ってどんなことするんだ？

「ではこれよりワンスの実習訓練を行う」

……。わかつてたけどさ。次々と生徒たちがワンスを使っていく。

(……。しかし)

気がかりだ。HRからずっとこちらを見ている。しかもけっこう遠くから。

「なあセイカ」

「なんですの？」

近くに居たセイカを呼ぶ。

「あのさ、さつきからこつちを見ている……」

「ああカンデ・ローナさんですね」

「カンデ？」

「ええ、G2の中でも1番下ですわ」

フツと軽く笑うセイカ。うん……

「セイカ」

「はい？」

セイカは疑問顔を見せ、こちらに顔を寄せる。こいつはこいつで美人だからあまり寄られると困るな……

「お前が強いことはわかるよ。でも……だからと言って下のやつを嘲笑うのは良くないぞ？」

そう俺が注意すると

「うっ……。まあ修司さんがそうおっしゃるなら……」

しぶしぶOK。案外普通に説得できたな。そして俺はそのカンデ・

ローナに近づく。

「なあ？」

「わっ！」

いきなり後ろから声をかけたからだろうか？びっくりされた。まあそりゃそうか。

「な、な、なんだ？」

うわー、すげえ動揺。まあそれは置いていて。

「俺は中野修司。よろしくな」

スッと手を出す。もちろん握手のためだ。

「……ん」

はずかしいのかローナは赤面しながら握手に応じてくれた。うん、いいやつだ。

「あれ？」

「こ、今度はなんだ？」

ふと気付いたことがあった。

「お前、刀でも振ってるのか？」

「な、なぜそれを・・・？」

「いや、俺も昔やってたんだ。剣道」

「ケンドウ？」

「いや、こっちの話だ」

そっか、こっちにも刀が・・・

カンデ・ローナ（後書き）

どうも。今回は新キャラ登場ですね。

次回の予告は魔法、ワンスとは基本どのような物なのか？を説明していこうと思います。

いつも少ない文章の更新ですがよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5465z/>

G20

2011年12月29日12時53分発行